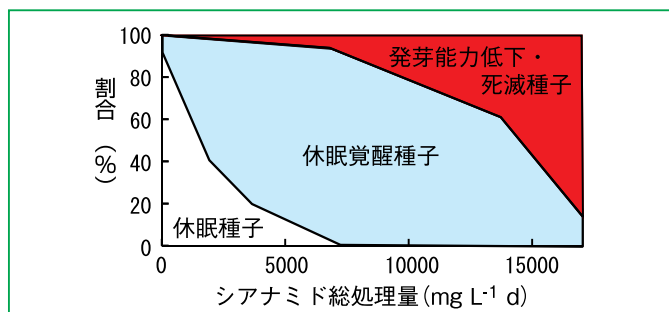


石灰窒素散布による漏生イネの発生低減

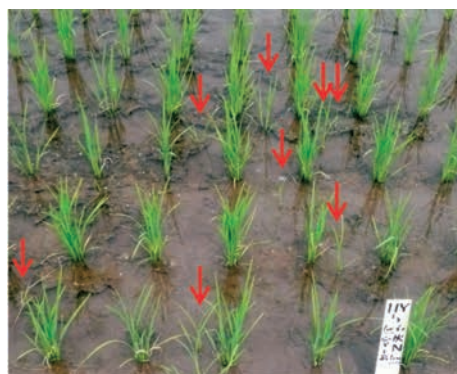
食料自給率の向上、食用米の円滑な生産調整、水田の高度利用の観点から、家畜のえさとなる飼料用イネの作付けが奨励されています。飼料用イネの栽培では、単収を高めるために食用品種とは異なる多収品種の作付けが推奨されています。しかし、多収品種の作付け後に食用品種を作付けると、多収品種のこぼれ粳に由来する漏生イネが発生し、食用米に多収品種の米が混入して品質低下の問題を生じることがあります。また、こうした問題を懸念して、食用品種を飼料用向けに作付けている事例も多くあります。安心して多収品種を栽培するために、漏生イネ対策が求められています。

《石灰窒素による漏生イネ対策》

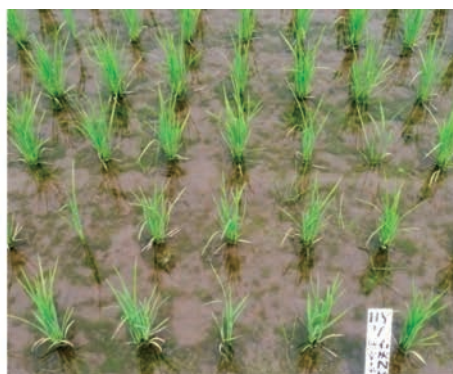
漏生イネの防除には複数の対策を講じることが重要です（農研機構発行「飼料用米の生産・給与技術マニュアル2015年度版」参照）。その対策の一つとして、石灰窒素の利用が有効であることが新たに明らかになりました。石灰窒素



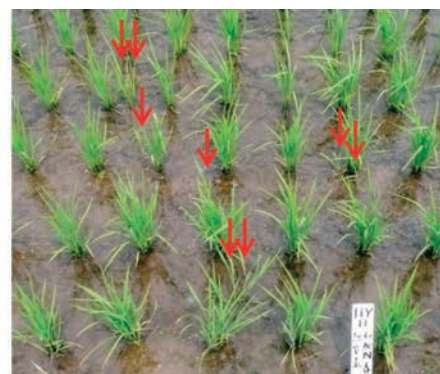
図／石灰窒素由来のシアナミド処理が種子の生理状態に及ぼす影響
多収品種「タカナリ」の2011年産種子。種子の生理状態は、石灰窒素由来のシアナミド溶液に浸漬後の調査による種子の発芽率に基づく。
シアナミド総処理量＝処理溶液中のシアナミド濃度×処理日数。



石灰窒素無処理



石灰窒素秋処理（圃場表面の種子に散布）



石灰窒素春処理（種子が埋土状態で散布）

写真／石灰窒素散布が移植栽培における漏生イネの苗立ちにおよぼす影響

10月中旬に種子をわら等残渣のない圃場に散布して擬似的な脱落粳を作成。播種翌日に粒状石灰窒素を50kg/10a散布する秋処理、石灰窒素を散布しない無処理を設定。播種後約3週間防鳥網で鳥害を防いだ後に耕起。翌年4月中下旬に石灰窒素を散布する春処理も設定して移植栽培。矢印は多収品種「ふくひびき」の漏生イネを示す。



水田作研究領域

大平陽一

OHDAIRA, Youichi

に含まれる成分のシアナミドは、水稻の種子に対して眠りを覚ます（休眠覚醒）効果、発芽能力を低下させて死滅させる効果を持ちます（図）。多収品種の収穫後、秋季に石灰窒素を10aあたり50kg散布すると、翌年、多収品種由来の漏生イネの発生は大きく低下します（写真）。なお、秋季散布に比べて効果は劣りますが、圃場表面に種子がある状態であれば、作付け前の春季散布にも漏生イネの発生抑制効果があります。

《石灰窒素利用における留意点と今後の課題》

種子が土の中に埋まった状態で石灰窒素を散布しても効果がありません（写真）。このため、石灰窒素を散布してすぐに耕起した場合、漏生イネ対策としては効果がありません。圃場表面の種子に石灰窒素を散布し、2～3週間不耕起状態を保つ必要があります。この他に、石灰窒素には肥料分である窒素が含まれるので、秋に石灰窒素を10aあたり50kg散布した場合には、翌年水稻を作付けする時に基肥の窒素を10aあたり1.0～1.5kg低減できます。この研究では、圃場からワラを取り除いた条件で試験していることから、今後はワラがある条件での処理法について検討する予定です。